

教育に関すること

1. 取り組みの経過

取り組みの経過を整理すると次の表のとおりです。

回数・日程	テーマと成果	方法・内容
③ 4 / 10	市の良い点、良くない点について	カード記入、模造紙にレイアウト
④ 4 / 24	市の良い点、良くない点について 委員の提案説明 高齢者グループと小6～中2の年齢の生徒の交流、社会性（礼儀） ビジネスプラン（高齢者と小学生の交流のプラン）：データ等の冊子で報告	カード記入、模造紙にレイアウト
⑤ 5 / 8	テーマ 学力の2極化、寝屋川市内の地域差 テーマ 社会教育には「ありがとう」「我慢する」が必要（高齢者の役割である） テーマ 学校教育と社会教育との連携 最終目標	カード記入、模造紙にレイアウト
⑥ 6 / 5	中間発表	
⑦ 6 / 19	具体的にどんな活動をするか テーマ① 親対象の教育 テーマ② 学校内対象 テーマ③ 地域との連携 テーマ④ 共通事項 テーマ① 親対象 + テーマ② 学校内対象 テーマ② 学校内対象 + テーマ③ 地域との連携	カード記入、模造紙にレイアウト
⑧ 7 / 3	具体的にどんな活動をするか	カード記入、模造紙にレイアウト
⑨ 7 / 17	まちづくり提言書づくり みんなで楽しもうねやがわーえ・が・おー 元気で明るいまちづくりーねやがわクラブー	提言書骨子 提案図
⑩ 7 / 31	まちづくり提言書づくり 報告・発表練習など	

2. 寝屋川市の良い点、良くない点について

寝屋川市の良い点、良くない点について、次の表のように整理しました。

視点	良い点	良くない点
教育について	・小学校の合併により、教育の現場の活性化につながっている ・教育機関が充実している：摂南大、電通大、府立高専 ・市教育委員会のプラン方針は学習内容と精神面ともにすばらしい	・学校規模が違いすぎる ・小学校の門が閉鎖されている ・小6年生～中2の学力、素行（行儀）とも良くない ・小中学生の学力が平均以下？ ・教育の行事等への父親の参加が少ない、子どもに対して干渉しすぎる母親 ・市教育委員会の取組は、具体的に進められていないのではないか、進展が見えない
市民生活の利便性	・人口が多い ・生活がしやすい、商店街が多い、3年後の寝屋川市駅東地区に期待している ・自転車が多い ・公共の交通が便利、急行が停車する	・公共施設の配置がバラバラ ・文化活動を発表する場や施設(ホール)が少ない ・核家族、単独世帯が多い ・便利不便が両極端 ・寝屋川駅前の商店街がさみしい ・住宅内の区画整理が遅れている、道路がせまい ・用水路にゴミを捨てる人が多く、水がきたない
野外空間	・広域的な公園がある ・公園がきれい、親水空間があり、桜がきれい	・公園が少ない ・身近に遊ぶ場所がない、子ども（小学生）が放課後に居場所がない ・テニスコートを借りるのに手続きが面倒
市民活動	・「元気ねっと」、「あきんどねっと」などの市民活動が活発 ・地域がボランティアで子どもを見守っている ・福祉の活動面は市、民間(ボランティア)を含め近隣市と比べレベルが高い	・ボランティア活動する団体に依存しすぎる ・ボランティア活動に依存するならば、ポイント制等の対応策を考えればどうか ・自治会単位の指導支援が少ない
P R	・淀川：知名度が高い	・市外の人に、寝屋川の文化や情報があまりP Rされてない ・市外への市の良い所のP Rが下手

3. 将来目標(スローガン)

寝屋川市の教育に関する将来目標(スローガン)は次のキーワードを、提案します。

- 教育しやすいまち、子育てしやすいまち
- 「ゼーンぶ楽しもうよ！同じやるならまず参加しよう！チャレンジ」
- みんなで楽しめる、元気で明るいまちづくり

子ども、親、高齢者、働く人、学生など、いろんな人が、いろんな活動にチャレンジし、参加し、みんなで楽しみ、元気で明るく、教育や子育てがしやすいまち寝屋川をめざします。

4. 活動イメージの提案

次に、将来目標(スローガン)を具体化するための活動イメージの提案を、以下の4つのテーマに沿って行います。

テーマ①親の教育

テーマ②学校内での教育

テーマ③地域との連携

テーマ④共通、複数の立場の連携

現状と問題点、課題	活動イメージ
テーマ①親の教育 ・世代によって親と子のコミュニケーションのとり方がちがう ・コミュニケーションのとり方等は大人の方が子どもたちについていけない ・安心安全メールの利用者は多い ・「おやじの会」は全国ネットの組織力があり、市内でのコミュニケーションも良い。 ・母親同士のコミュニケーションについては、学齢期までは、学年会、乳児健診、子どもセンター等でできている ・今の親の関心事等は、保育所、塾、HPネット、スポーツ新聞、パチンコ屋、コンビニ・スーパー等である ・成人教育講座の参加者は、学校間で差があり、積極性がないところもある ・親学の講師は、塾の先生特に歳に近い講師と、“就活”との関係で、企業役員が効果的である ・PTA活動自体が低下している。市立校園PTA協議会、市立幼稚園・小学校・中学校の各単位PTAの役員間の交流はあるが、会員全体の交流ができていない ・親層の教育・学習が第1に必要なである ・親の意識改革、親の教育が必要である	●子どもの目線をさがす（子どもが何に興味を持っているのかを調べる）《市民・行政》 年齢別、低・高学年別、テーマ別に、ホームルーム等を活用し、子どもが何に興味を持っているのかを調べる ・年齢別、低・高学年に分ける ・テーマの設定 ・ホームルームの活用 ●親層の教育は、会場は生活に近い施設、手法はメディアを活用する《市民・行政》 保育所、子どもセンター、コミュニティセンター等の施設、安心安全メール、ケーブルテレビ、しつけチャンネル等のメディアを活用して親層の教育を行う ・施設：保育所、子どもセンター、コミュニティセンター 等 ・メディア：安心安全メール、ケーブルテレビ、しつけチャンネル 等 ○しつけチャンネル地域特集等のケーブルテレビの利用

●：重点的な活動イメージ

○：その他の活動イメージ

現状と問題点、課題	活動イメージ
テーマ⑧学校内での教育 ・学童保育が少ない。学童保育士には資格がいる ・寝屋川市内には地域差がある ・学力の2極化が進んでいる ・教育内容は、中央集権型から多様性の方向に向かっている ・授業時間がたりない ・地域での取り組み等に関するピラが多いと子どもが選択できない。配布は、先生の自由で、先生の判断が入る ・学校の教育は学力にかたよっており、学校にゆだねると学力だけになってしまう ・教育方法は、マンガやアニメの方が子どもに理解される ・自分で調べたことは覚えている。例えば、自分調べで、修学旅行先を調べて、行って、発表してまとめる ・学校側は、見守る、教えるのみで、制度的に横の連携ができていない。 ・小学校の校門を閉めているので地域の利用は難しい ・各学校には、地域の利用に関する受け入れ体制はある。カード制で（市民所有の通門証）学校が開かれている場合もある ・校庭開放が徐々に増えている ・校門の開放や「社会を明るくする運動」の取り組みは、先生の熱心さにかかわる。 ・空き教室の利用が大切である ・子どものやる気が大切である	● 休日での校庭の有効活用のため校門の開放を目指す《行政》 - 生徒の利便性の確保や公園のように校庭の利用のために、校門の開放を目指す ・ 公園のように校庭を利用する ・ 生徒の利便性の確保 ● ようこそ先輩方式で、各学校の先輩の話を聞く機会を設ける《市民・行政・その他》 - 寝屋川市出身の有名人等をリストアップし、その人の出身校で話を聴く機会を設ける ・ 寝屋川市出身の有名人等のリストアップ ○ 学校がマンパワーとしてボランティアを受け入れる。まず、指定校を選定し、成果ができれば広げていく ○ 高齢者が子どもに話を聞かせる会を設ける ○ 先生が忙しく、取り組みが広がらないので、その役割を市民が代わる ○ 小学校選択制を生かす

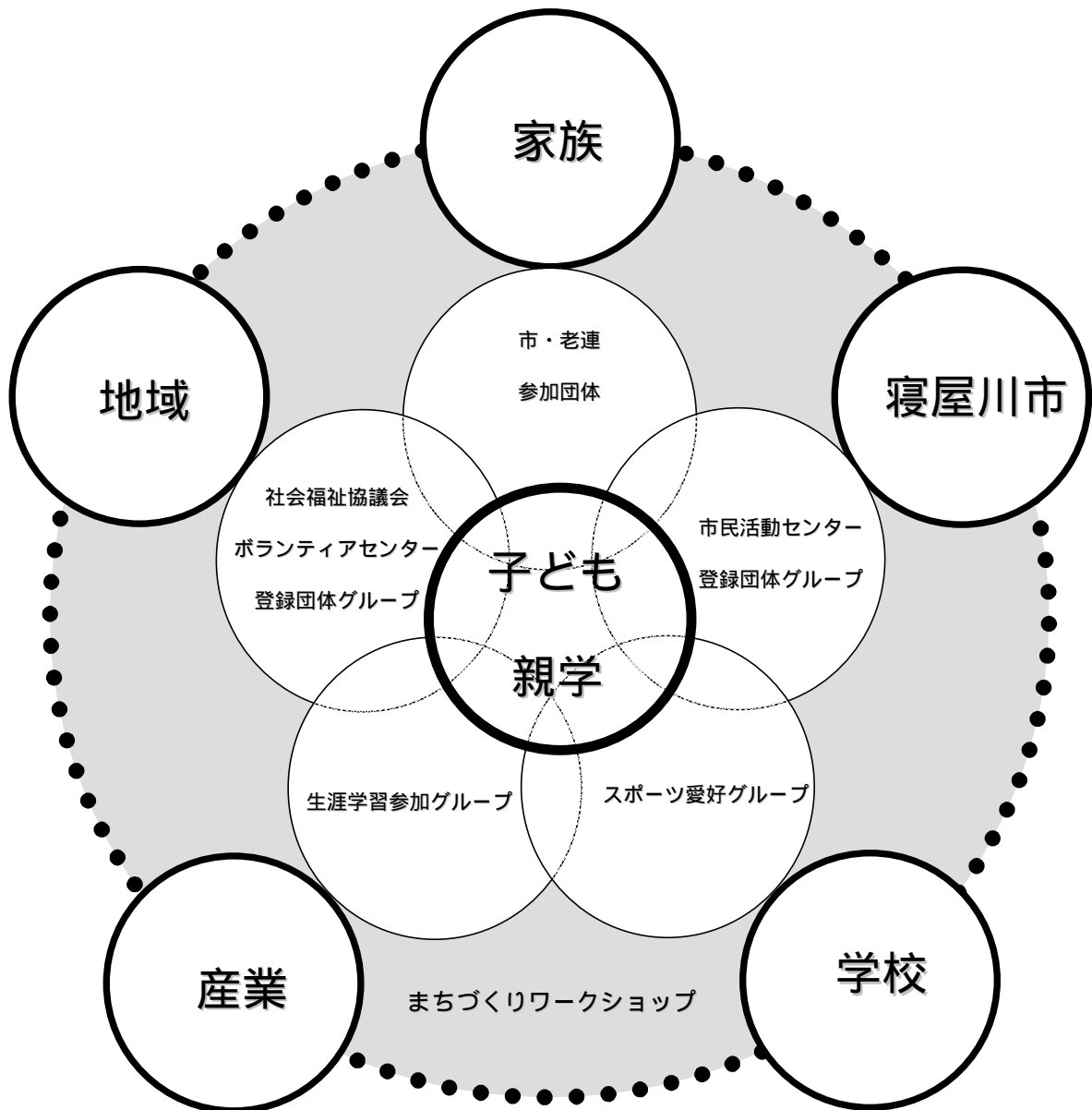
現状と問題点、課題	活動イメージ
テーマ◎地域との連携 ・ 少子高齢化が進んでいる ・ 基礎的な考え方を養うために、保育園児、小学校低学年の情操教育が必要である ・ 今の子どもには差があり、元気、時間、親の理解があるかどうか ・ 子どもは、「ねやがわピース」では平和の塔の行事よりも出店(でみせ)のほうに興味がある ・ 父親の存在が弱い ・ しかってくれる人が今の子どもにいない ・ 今の子どもは、人に対して“力加減”がわからない ・ 中学校からの要請が有り、読み聞かせの後継者が求められる ・ 個人が選べる情報入手や交流等のチャンネルがたくさんある ・ サークル間の連携をとるための情報がつかめない	● サークル間の交流《市民・行政》 □ コミや多様な活動のチャンネルの活用、行政機関の活用もふくめてサークルの紹介所の設置を行い、サークル団体同志の交流を進める ・ 地域コミュニティを生かし、地域で交流を深める ・ 情報を口コミで広げる ・ 多様な活動のチャンネルをもつ ・ サークル団体同志のコラボレーションを進める ・ 行政機関の活用を含め、サークルの紹介所を設置する
	● 子ども間の交流《市民・行政》 - 中学生はクラブ(部活)単位、小6～中学生の学齢を対象とする場合はクラブ(部活)をこえて交流を行い、子ども間の交流を進める ・ 部をこえて小6～中学生の学齢を対象とする交流を進める ・ 中学生のクラブ(部活)単位で交流を進める
	● 一般市民と子どもとの交流《市民・行政・その他》 - 市子ども会育成連絡協議会と行政が一緒になって小・中・高までのリーダーを育成し、さらに両方の組織づくりを進め、また、中学生との交流は市民活動グループ(既設)を活用するとともに、教育ボランティア従事者の参加に対し参加意欲の向上のためポイント制を導入し、一般市民と子どもとの交流を進める ・ 中学生との交流には市民活動グループ(既設)を活用する ・ 市子ども会育成連絡協議会と行政が一緒になって小・中・高までのリーダーを育成し、さらに両方の組織づくりを進める ・ 教育ボランティア従事者の参加に対しポイント制を導入する(参加意欲の向上) ○ 学校単位の掃除を、大人からはじめてみる

現状と問題点、課題	活動イメージ
テーマ◎地域との連携 ・伝統的、テーマ的な組織があるが、組織に強制力がない ・生涯学習誌掲載の市民活動団体・サークルは1200、社会福祉協議会は50、市民活動センターの登録団体は160、計1400グループほどある ・既存の団体の連携がうまくいっていないから、既存団体間、各グループを連携するのが難しい ・行政の施設担当は会員の数が増えるだけで満足しており、施設の利用者、団体をさがせていない。行政は器はつくるが、来る人は気にかけていない ・市民活動センターは、相談、紹介はしているが、積極性が望まれる ・「寝屋川市まちのせんせいバンク」は実施中である ・歌のコンサートでは高齢者の方が集まる ・理系の学生は、専門分野(コンピューター・ロボットなど)の知識等は身につけているが、交流は得意ではない ・「社会性」を身につける事が大切である ・母子家庭、父子家庭への対応が必要である ・女性の意識変化が必要である ・他世代との交流が必要である	●高齢者と子どもとの交流《市民・行政》 イベントの企画、スポーツ活動などで、高齢者と小学生や中学生の子どもとの交流を進める ・高齢者と小学生、小6～中2年の交流を進める ・老人会利用して、高齢者が戦中戦後の時代の話をしてみる ・手づくりおもちゃ、手芸など、高齢者が夏まつりの出店(部屋、運動場)の企画を進める ・高齢者と子どものイベントを企画する。また、既存イベントにコーナー出店する ・中学生との交流はスポーツが主力と考えられ、高齢者はスポーツ活動ボランティアの斡旋又はサブリスク役割等の役割分担をする ・子どもと高齢者は、スポーツ分野から交流をはじめて、定期的化し、スポーツにかたよらないようにイベント等を含め企画実施を輪番制で進める ・老人ホームへの訪問を、クラス単位で受け入れる ・学生提案として「緑の家」の提案がある<参考1:参照> ●一般市民と高齢者との交流・役割分担《市民・行政》 中学校の周辺の掃除活動、親の役の分担等により一般市民と高齢者との交流・役割分担を進める ・高齢者や市民のグループで、中学校の周辺の掃除活動を行う(交流の糸口) ・核家族を対象に高齢者単独家庭の人が活躍できるようにする ・男親の替わりを高齢者(第三者)が出来るようにする ・学校教育と社会教育のリンクを進める

現状と問題点、課題	活動イメージ
テーマ⑩共通、複数の立場の連携＜参考２：参照＞ ・今は昔の縦社会の関係がうすい ・既存の団体の連携がうまくいっていないから、既存団体間、各グループを連携するのが難しい ・学校、地域、おやじの会等で、いろんな切り口で参加ができる ・おやじの会でも、教頭・校長がことなかれ主義であれば進まない ・共通体験が大事である ・市民が肩代わりする場合の問題点は、安全面である ・小学校には、ボランティアが活発な学校もある ・おやじの会では、野球、ボーリングの活動をしている ・地域力と教育観を関連づけられるのはサークルである。活用するならばそのサークルを活用してはどうか。生涯学習案内他資料によると、１，４００団体である。 ・教育委員会をまきこむことが必要である ・学校単位の掃除等はＰＴＡからまきこむ必要がある ・対象者は、子ども・若い人・主婦・ヤンキー夫婦、主体別には、ＰＴＡ・行政（信頼性）・大学・企業・水辺の会、客観的に気軽に入りやすい立場の人間、キーワードはステイタス・カリスマ性・ネーミング、新しい力の導入は、よそ者・若者・バカ者（既成事実等にこだわらない人）が大切である	●みんなで楽しもうねやがわーえ・が・おー＜図１・参考３：参照＞《市民・行政・その他》 ねやがわの「子ども」を中心に、「家族」以外に「寝屋川市」、「学校」、「産業」、「地域」が連携を進める ・「寝屋川市」は、「情報、連絡、補助」で構成 ・「学校」は、「先生、文部科学省、ＰＴＡ、卒業生」で構成 ・「産業」は、「オブザーバー、提供、補助、後援会」で構成 ・「地域」は、「ボランティア、サークル、まち内会、おとなりさん」で構成 ●元気で明るい街づくりーねやがわクラブー＜図２：参照＞《市民・行政》 団塊世代が中心に活動し、また、市民活動センター登録団体を始め各種のサークル、団体、グループなどとの協働を図るとともに、行政の諸機関の積極的な協力支援をあおぐ ・市民活動として活動しやすい環境にある勤めを終えた団塊世代が中心に活動 ・市民活動センター登録団体を始め各種のサークル、団体、グループなどとの協働を図る ・行政の諸機関の積極的な協力支援をあおぐ ○何かの機会に集まることができるようにする ○テーマをきめてコンテストを実施する ○寝屋川市には、大学、企業（中小）、おやじの会、３０歳～５０歳の母親等がいて、その力を借りる ○第三者機関が、親と学校の間を連携する ○高齢者はリーダーとして、主に礼儀、道徳の教育を行う

(仮称)ねやがわクラブ え・が・お

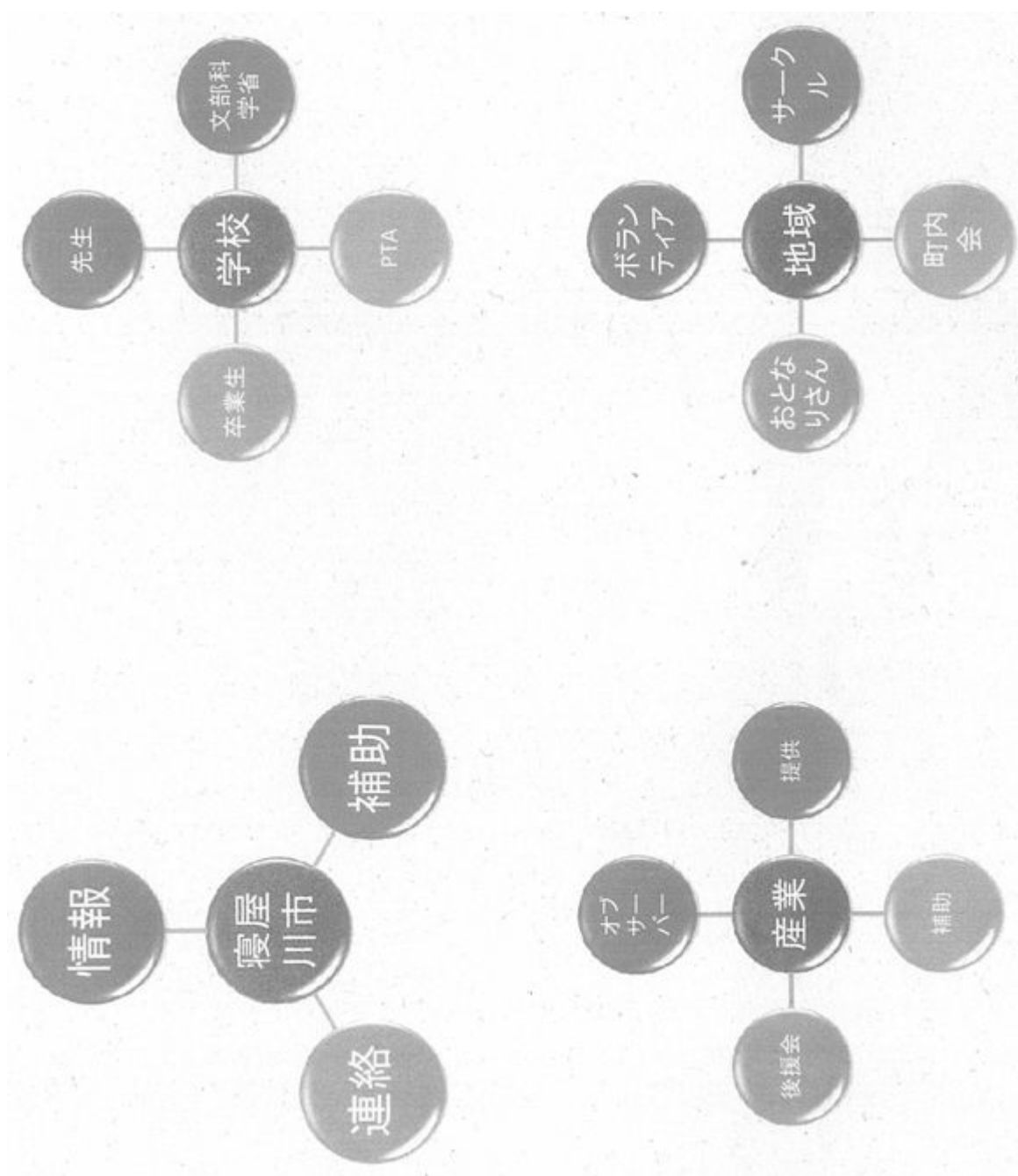
第三者機関として、団塊世代、各種のサークル、団体、グループ、行政の諸機関の積極的な協働を中心に、「家族」以外に「寝屋川市」、「学校」、「産業」、「地域」が連携を進めます。その連携の基礎を「第五次寝屋川市総合計画策定に係わるまちづくりワークショップ」が担います。



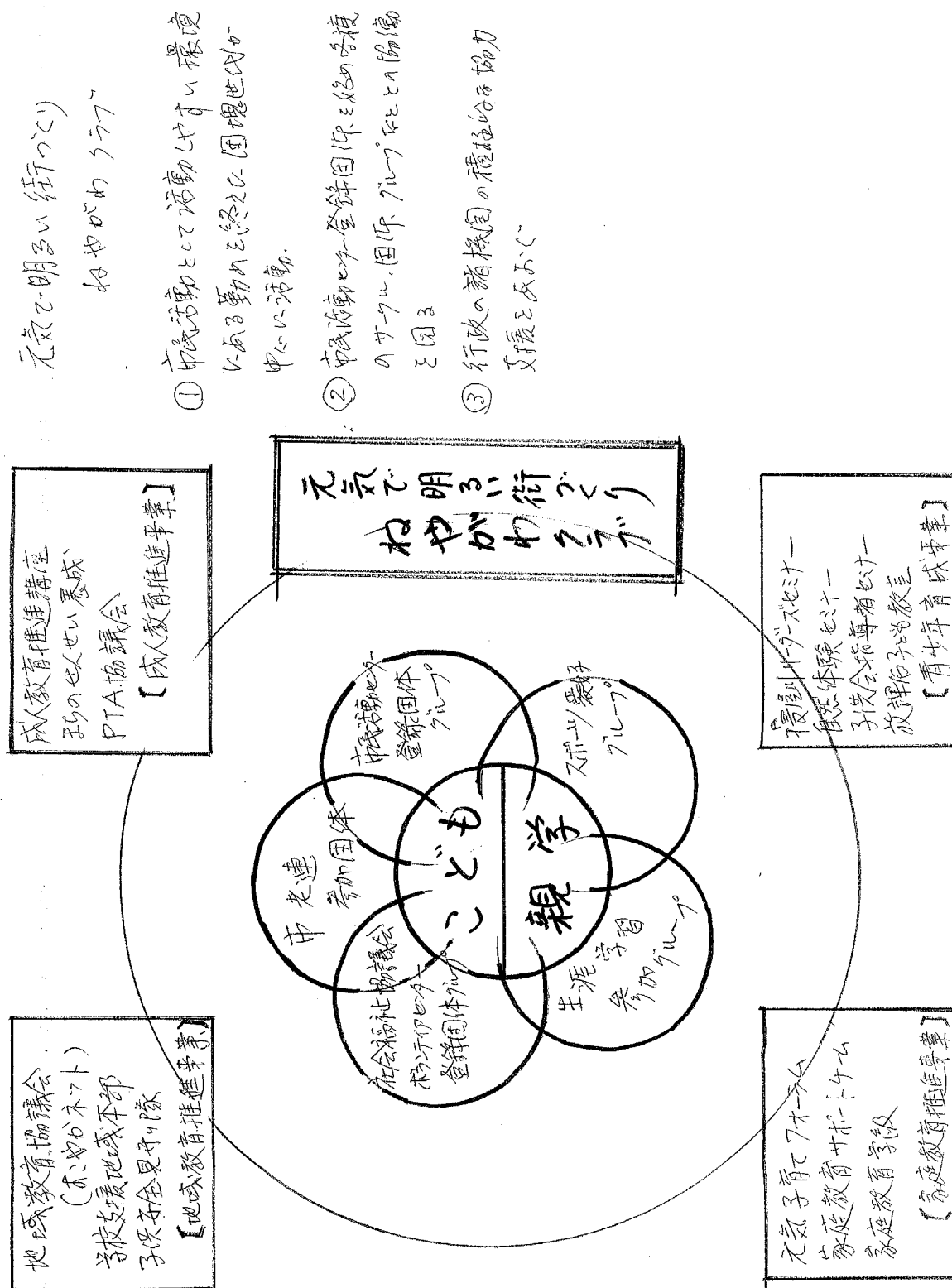
第五次寝屋川市総合計画策定に係るまちづくりワークショップ

< 図1 > みんなで楽しもうねやがわ～え・が・お～





＜図2＞元気で明るい街づくり ねやがわクラブ



< 参考 1 > 緑の家～グリーンでクリーンなねやがわ

緑の家 

～グリーンでクリーンなねやがわ～

摂南大学 経営情報学部
久保研究室 9期生チーム

「このプランを思いついたきっかけ」

- 高齢者が増えている
(寝屋川市高齢者保健福祉計画より)
- 両親が共働きの子どもの多い
(ユークキャン調査, 日経新聞より)
- 父子・母子家庭の割合が高い
(寝屋川市調査より)

「このプランを思いついたきっかけ」

- 孤立する高齢者が増えている
- 子育ての負担が大きい
- 放課後にひとりぼっちの子供が増えている

「わたしたちにできること」

- 高齢者がくつろげる場所
- 子どもが放課後に両親が帰ってくるまで安心して居られるような場所



緑の家

「緑の家とは？」

- 子どもが放課後におじいちゃんの家に行く感覚で行ける場所
- 高齢者, 子ども, 学生が交流できる場所
- エコ活動を発信する場所

エコ活動 学生ボランティア

緑の家 



教育機関 福祉機関 工業会 寝屋川市

クリーンな寝屋川市へ！



学生にとってのボランティア (イメージ図)



「寝屋川市への貢献」

生活しやすい街にする



「寝屋川市への貢献」

エコ活動の発信



「寝屋川市への貢献」

社会性を身につける きっかけとなる



「このプランで伝えたいこと」

嬉しいときは
誰かに話して
幸せを分けてあげたい。
誰かが幸せなときは
私が聞いて
幸せを分けてもらいたい。
だから誰かに会いに行く。

寝屋川市の学生が考える ビジネスプランコンテスト 応募用紙

タイトル	緑の家 ～グリーンでクリーンな寝屋川へ～																																																																				
対象とする人・業界	寝屋川市に住む子供、高齢者、共働きの家庭、父子・母子家庭 寝屋川市内の大学に通う学生																																																																				
あなたがこのビジネスプランを思いついた「きっかけ」	【少子高齢化】 現在、寝屋川市では少子高齢化が深刻な問題となっており、寝屋川市からも高齢者に対する様々な福祉計画が計画されている。例を挙げると寝屋川市高齢者保健福祉計画などがそうである。 表1の年代別人口比率から見てみても、深刻な問題なのは明白である。 将来人口の推計 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th><th>平成16年度</th><th>平成18年度</th><th>平成19年度</th><th>平成20年度</th><th>平成26年度 (人)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>総人口</td><td>248,613</td><td>244,362</td><td>242,238</td><td>240,114</td><td>224,803</td></tr> <tr> <td>40歳未満</td><td>120,640</td><td>114,457</td><td>111,366</td><td>108,274</td><td>86,828</td></tr> <tr> <td>40～64歳</td><td>88,499</td><td>85,629</td><td>84,194</td><td>82,759</td><td>77,390</td></tr> <tr> <td>65歳以上</td><td>39,472</td><td>44,276</td><td>46,678</td><td>49,081</td><td>60,585</td></tr> <tr> <td>65～74歳(前期高齢者)</td><td>25,709</td><td>28,690</td><td>30,180</td><td>31,671</td><td>36,594</td></tr> <tr> <td>75歳以上(後期高齢者)</td><td>13,763</td><td>15,586</td><td>16,498</td><td>17,410</td><td>23,991</td></tr> <tr> <td>高齢化率</td><td>15.9%</td><td>18.1%</td><td>19.3%</td><td>20.4%</td><td>27.0%</td></tr> <tr> <td>後期高齢者の割合</td><td>34.9%</td><td>35.2%</td><td>35.3%</td><td>35.5%</td><td>39.6%</td></tr> </tbody> </table> (表1) 【共働きの家庭の増加、父子・母子家庭への対策、女性の意識変化】 次に共働きの家庭が増加していることを挙げる。これには現代の女性の職業に関する意識変化が大きく関係している。株式会社ユーキャンの意識調査では以下のようになっている。 今後、チャンスがあれば働いて（収入を得る仕事をして）みたいですか？（全体） (%) <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%; text-align: center;">はい</td><td style="width: 20%; text-align: center;">いいえ</td></tr> <tr> <td style="text-align: center;">90.7</td><td style="text-align: center;">9.3</td></tr> </table> 働いてみたい一番の理由は何ですか？（働きたい主婦） 70 (%) <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">今より多くの収入を得たい</td><td style="width: 20%; text-align: right;">59.6</td></tr> <tr> <td>社会との接点を持っていたいから</td><td style="text-align: right;">14.0</td></tr> <tr> <td>今持っているスキルや資格を活かしたいから</td><td style="text-align: right;">8.5</td></tr> <tr> <td>様々な人と交流を持ちたいから</td><td style="text-align: right;">7.7</td></tr> <tr> <td>自分磨き（自身のキャリアアップ等）のため</td><td style="text-align: right;">6.6</td></tr> </table> また、寝屋川市内の父子・母子家庭の増加が以下のグラフより確認できる。これらのことからより良い環境での子育てと、各家庭への負担軽減が必要になっている。		平成16年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成26年度 (人)	総人口	248,613	244,362	242,238	240,114	224,803	40歳未満	120,640	114,457	111,366	108,274	86,828	40～64歳	88,499	85,629	84,194	82,759	77,390	65歳以上	39,472	44,276	46,678	49,081	60,585	65～74歳(前期高齢者)	25,709	28,690	30,180	31,671	36,594	75歳以上(後期高齢者)	13,763	15,586	16,498	17,410	23,991	高齢化率	15.9%	18.1%	19.3%	20.4%	27.0%	後期高齢者の割合	34.9%	35.2%	35.3%	35.5%	39.6%	はい	いいえ	90.7	9.3	今より多くの収入を得たい	59.6	社会との接点を持っていたいから	14.0	今持っているスキルや資格を活かしたいから	8.5	様々な人と交流を持ちたいから	7.7	自分磨き（自身のキャリアアップ等）のため	6.6
	平成16年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成26年度 (人)																																																																
総人口	248,613	244,362	242,238	240,114	224,803																																																																
40歳未満	120,640	114,457	111,366	108,274	86,828																																																																
40～64歳	88,499	85,629	84,194	82,759	77,390																																																																
65歳以上	39,472	44,276	46,678	49,081	60,585																																																																
65～74歳(前期高齢者)	25,709	28,690	30,180	31,671	36,594																																																																
75歳以上(後期高齢者)	13,763	15,586	16,498	17,410	23,991																																																																
高齢化率	15.9%	18.1%	19.3%	20.4%	27.0%																																																																
後期高齢者の割合	34.9%	35.2%	35.3%	35.5%	39.6%																																																																
はい	いいえ																																																																				
90.7	9.3																																																																				
今より多くの収入を得たい	59.6																																																																				
社会との接点を持っていたいから	14.0																																																																				
今持っているスキルや資格を活かしたいから	8.5																																																																				
様々な人と交流を持ちたいから	7.7																																																																				
自分磨き（自身のキャリアアップ等）のため	6.6																																																																				

	母子世帯及び父子世帯の推移 <table><caption>母子世帯及び父子世帯の推移 (推定値)</caption><thead><tr><th>世帯</th><th>H2</th><th>H7</th><th>H12</th><th>H17</th></tr></thead><tbody><tr><td>母子世帯数</td><td>1,500</td><td>1,400</td><td>1,650</td><td>2,150</td></tr><tr><td>父子世帯数</td><td>300</td><td>250</td><td>220</td><td>250</td></tr></tbody></table> 【寝屋川市のイメージ・環境】 そして、寝屋川市民への意識調査では、寝屋川市についてマイナスのイメージを持っていることが分かった。 寝屋川市に居住、通勤・通学している人に、明確な誇りや良いイメージを持つことができないのが現状である。これをなんとか改善したい。 【寝屋川市内の大学】 寝屋川市には現在、大学は摂南大学・大阪電気通信大学・大阪府立工業高等専門学校の三つが存在する。これらを研究・ボランティアをかねて活用させる。	世帯	H2	H7	H12	H17	母子世帯数	1,500	1,400	1,650	2,150	父子世帯数	300	250	220	250
世帯	H2	H7	H12	H17												
母子世帯数	1,500	1,400	1,650	2,150												
父子世帯数	300	250	220	250												
事業内容	< 本プランの概要は以下の通りである > 寝屋川市内の共働き、父子・母子家庭の子供に対する良い環境づくりと、両親の負担軽減を実施する。同時に増え続ける高齢者に子供や同じ年代の人との交流の場を作り、孤立をなくし、元気で活発な高齢化社会を実現させる。そこでの活動の一環として、大学生との交流や植樹・廃品回収・清掃活動を行い、寝屋川市のマイナスイメージを改善したい。 【理念】 「寝屋川市を将来住みたいと思える街にしたい」 【目標】 「高齢者にも共働き、母子・父子家庭にも優しい環境づくり」 【事業主体】 教育機関（小中学校）、寝屋川市内の福祉機関、寝屋川市、寝屋川市内の中小企業、寝屋川市内の大学															

	【各機関の役割分担】 ・教育機関： 設置場所の提供、各家庭への伝達 ・寝屋川市内の福祉機関： 場の改修の原案を提供、高齢者への伝達、高齢者の安全のための介護者の提供 ・寝屋川市： 出資と設置に関する制度の配備 ・寝屋川市内の企業： 場の改修作業 ・大学： ボランティアを募る。また、福祉・教育関係を専攻するものには授業の一環として（集中講義など）施設に関わるようにする。 【具体的な事業の内容と展開】 上記の内容を踏まえた上で、具体的な事業の内容を説明していく。 まず、第一に、教育機関には廃校舎の再利用、もしくは空き教室の利用許可を求める。現在、少子化により小学校数を減らす姿勢がみられる。このことから実現可能と推測する。さらに、児童を通して各家庭にこの事業の内容の伝達を行ってもらう。また、活動の一環として廃品回収や、植樹、清掃活動などの企画も担当してもらう。 第二に、福祉機関には校舎改修の原案と高齢者（障害者を入れようか検討中）にこの事業の内容の伝達を行ってもらう。ここでの改修の原案とは高齢者のためのバリアフリー設備の提案である。又、現場の安全監督として数名の介護者の提供を求める。 第三に、大学機関には事業の一環としての施設とのかかわりや、ボランティアを募るようにしてもらう。これは児童との交流や、児童に勉強を教えるといった活動を行うためである。このことにより、普段、児童と接する機会がない大学生に児童との交流の場を設ける。児童、学生と共に様々な年齢の人間と交流することによって、社会性が身につけることが期待できる。 第四に、学生の研究としてアンケート収集の場の獲得や、このプランを実施することによってどのように寝屋川市が変化するかといったデータがとれる。また、そのデータを検証し、ほかの地域に適用できないか、などといった試みが展開されることが期待できる。 また、大学がボランティアの場を提供することにより、ボランティアサークル・団体に所属していない学生でも気軽に参加が可能となる。
--	---

	第五に、企業には福祉機関の原案を元に、校舎の改修作業を行ってもらう。これにより企業が活性化する手助けになるのではないかと考える。また、福祉への貢献が企業のイメージアップにもつながると期待できる。 最後に、寝屋川市は資金の提供、及び施設建設に関する制度（具体的な内容は検討中）の配備と、このプランの内容を市民へ伝達してもらう。このことにより、さらなる利用者の増加が見込める。また、様々な機関と連携して事業を行うことによって、これから先の寝屋川市での政策、取り組みがしやすくなるのではないかと期待できる。 これら機関の協力を得、高齢者がくつろげ、各家庭が安心して子供を預けられる児童館と福祉施設をあわせた交流の場を建設したいと考える。感覚として、子供が「おじいちゃんの家遊びに行く」といったアットホームな雰囲気がある場にしたい。
事業実施による社会への貢献	本プランを実施することで、各家庭の親は安心して子供を預けることができる。これにより、共働き・父子・母子家庭への負担が軽減され、各家庭の自立が見込めるのではないかと考える。 さらに、子どもと高齢者を交流させることによって、高齢者の孤立を防ぎ、高齢者層の活性化が期待できる。そこでの一環として大学生との交流や植樹・廃品回収・清掃活動を行うことができる。高齢者層の活性化は寝屋川市全体の活性化につながると期待できるし、各家庭の負担軽減はより良い生活を市民にもたらすと考える。 さらに、植樹等のエコ活動は寝屋川市の環境を改善し、市のイメージアップや市民の意識改善にもつながると期待できる。 ボランティア活動においては、学生が主体となることで、大学はもちろん、寝屋川市のイメージアップを望む。また、市民からの学生に対する意識改善に繋がると期待できる。
その他	この事業の学生にとっての効果としては、自分たちの新たな居場所ができることであると考えている。 「嬉しいときは誰かに話して幸せを分けてあげたい。誰かが幸せなときは聞いて幸せを分けてもらいたい。だから誰かに会いに行く。」、そういった気持ちをもった行動が「ボランティア」につながり、私たち学生にとっても「新しい居場所」として活用することができるような事業にしたい。 また、様々な年齢の人と交流することで視野が広がり、社会性を身に付けるきっかけ作りができる。

< 参考2 > 委員からの問題整理

教育問題

○ 学校教育

○ 社会教育

家庭教育

親学

言葉（会話）

- 疲れて帰っても、元気で「ただ今」と声をかけているか
- 近所の人に自分から声を掛けているか
- 1日1回、家族と会話の時間を設けているか
- 自分ひとりで喋っていないか
- 「ダメ」と言う前に、理由を説明しているか
- 親として、自分の気持ちを正直に伝えているか
- 妻から相談されたとき、面倒がらずに相談相手になっているか
- 学校や先生の悪口をこどもの前で言っていないか
- いそがしくて話が聞けない時「あっちに行つてなさい」と、追い払っていないか
- 言葉だけでなく、奥にあるこどもの気持ちを聞き取れているか
- 家族で決めたルールをこどもが破ったとき、厳しくしかっているか
- 出来ない事をしかるより、出来た事をほめているか
- こどもに自分の意見を言うように促しているか
- こどもがいじめにあったとき「いつでもお前の味方だよ」とこどもを支えているか
- 勉強の出来不出来で、こどもを評価していないか

言葉からのコミュニケーションの改善、向上を図る

こどもは「親の話し方」で変わる

行 動

- こどもの手本になる行動をする
- 親が毎日、見本を見せる
- 会った人には挨拶をするように仕向ける
- 人が集まる場所には連れて行く
- こどもを「相談相手」にする
- こどもの話の「聞き上手」になる
- こどもの話は遮らないで、最後まで聞く
- 会話が出来る子供に導く
- 「有難う」が言える習慣を作る
- 礼儀正しい習慣を持つ
- 道徳心（正しい事、悪い事、良いこと、良くない事、うれしい事、悲しい事、楽しい事、苦しい事、）を判ってもらえる様

こどもは「親の背中を見て育つ」

★ 問題点 井筒ぎの客席 父親の慢客が遅い客席

- (1) 地域教育、家庭教育の法的役割制（リ、ミヨのおおのておく相違的立場で）

1. 林は既述のバーニ・ニ・マダグ・プ、土居江動グループ、サ・クリ江

○「当座」は「ざい」「ざい」「ざい」の「ざい」に「ざい」を

- 参考 中央小学校が採用実施のチャレンジクラブ

(9) 既右の止、カハ活動のゲル、プロパグ

- 市民活動グループ（社会福祉協議会、市民活動センター、地域

< 参考3 > 子育て支援に関わる庁内及び関係団体との連携協力体制の整備 (大阪府寝屋川市)



文部科学省
MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

[サイトマップ](#)
[English](#)

文字サイズの変更

[詳細検索](#)

[お知らせ](#)
[政策について](#)
[白書・統計・出版物](#)
[申請・手続き](#)
[文部科学省について](#)
[教育](#)
[科学技術・学術](#)
[スポーツ](#)
[文化](#)

[トップ](#)
[教育](#)
[幼児教育・家庭教育に関すること](#)
[子育て応援します\(家庭教育支援室\)](#)
[家庭教育支援のための連携事例集](#)
[子育て支援に関わる庁内及び関係団体との連携協力体制の整備\(大阪府寝屋川市\)](#)

○ 子育て支援に関わる庁内及び関係団体との連携協力体制の整備 (大阪府寝屋川市)

子育て支援に関わる庁内及び関係団体との連携協力体制の整備

1 自治体・団体名:大阪府寝屋川市、寝屋川市教育委員会

2 自治体・団体の概要(人口244,914人 平成19年1月1日現在)

本市は、大阪府の北東部、淀川左岸に位置している。住宅都市として発展し、市制施行50周年を迎えた平成13年に特例市となる。

3 地域の特徴

本市は現在、第四次寝屋川市総合計画(2001年～2010年)の第3期実施計画(2005年～2007年)に基づき、まちづくりを推進している。第3期実施計画策定の方針である「元気都市 寝屋川」を実現するために、市民との協働によるまちづくりをめざしている。

家庭や地域の教育力を高めるために、平成12年度に全12中学校校区に地域教育協議会が設置され、学校・家庭・地域が協働して「地域の子どもは地域で育てよう」と様々な取組みを行っている。また、全24小学校において「地域子ども教室」の設置及び「子どもの安全見守り隊」の結成がされ、地域のボランティアの方とともに、子どもたちの体験活動や登下校時の見守り活動がおこなわれている。

4 連携の取組状況

①連携に至るまでの経緯

平成10年6月の第16期中央教育審議会「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機―(答申)」、平成12年12月の教育改革国民会議「教育を変える17の提言」を受けて、平成14年2月「寝屋川市家庭教育推進庁内検討委員会」を設置し、平成14年4月「寝屋川市家庭教育推進計画(3ヵ年計画)」を策定した。推進計画に基づき、推進初年度は、市民ぐるみの推進組織として平成15年2月に「寝屋川市家庭教育支援連絡会」を設置し、「ねやがわ家庭教育フォーラム2002」(15年度より「元気子育てフォーラム」に改名)を開催した。また、毎月第3日曜日を「家庭の日(元気ふれあいサンデー)」と決め啓発を開始した。推進2年目は、「赤ちゃんに絵本を贈ろう」事業及び「子育て支援カレンダー」作成・配付、「家庭教育ふれあいセミナー」の開催を開始した。推進3年目は、2年目の事業の充実に一層力を入れるとともに、平成17年3月に「寝屋川市家庭教育指針」を策定した。

②連携した取組の具体的内容・方法・実施状況

○ 「家庭教育庁内検討委員会」の概要

家庭教育の推進及び支援に関する施策の企画及び立案、部課の連絡及び調整、推進及び支援を目的に、平成14年2月に設置された。

地域教育振興室長を委員長として家庭教育に関係する以下の19課の委員をもって構成されている。

- (1) 人・ふれあい部(人権文化課長, 男女共同参画課長, 市民生活部消費生活センター所長)
 - (2) 環境部(環境政策課長)
 - (3) 保健福祉部(福祉政策課長, 健康増進課長, こども室長, 障害福祉課長)
 - (4) 学校教育部(学務課長, 教育指導課長, 教育研修センター所長)
 - (5) 社会教育部(社会教育課長, スポーツ振興課長, 教育センター所長, 中央図書館長, 中央公民館長, かがやき教育課長, 地域教育課長)
- 年間3回程度開催している。

○「家庭教育支援連絡会」の概要

家庭教育に関する情報収集及び意見交換, 家庭教育の支援策についての意見交換, その他家庭教育の支援に関する意見交換を目的に, 平成15年2月に設置された。

構成する委員は以下の家庭教育に関わる関係機関, 団体, 公募市民など15名で構成され, 委員長は互選によって選出される。

- (1) 地域教育協議会
 - (2) 地域コーディネーター
 - (3) 社会教育委員
 - (4) 市立校園PTA協議会
 - (5) 市子ども会育成連絡協議会
 - (6) 小・中学校校長会
 - (7) 幼稚園園長会
 - (8) 保育所所長会
 - (9) こどもセンター・子育て支援センターの職員
 - (10) 家庭児童相談室の職員
 - (11) 家庭教育に関して熱意のある市民
 - (12) 前各号に掲げる者の他青少年健全育成に係わる者
- 年間4回程度開催している。

○「家庭教育庁内検討委員会」及び「家庭教育支援連絡会」の役割

「家庭教育庁内検討委員会」においては, 各課で実施している事業のうち, 子育て支援や家庭教育に関するすべての事業をまとめ, 行政として実施している全事業を把握した。その中で, 家庭教育推進に関する事業を対象者や内容によって, 「学習の機会の充実と啓発」, 「人とつながる場と機会の充実」, 「人と人・家庭と地域と学校・組織と組織をつなぐ」の3つの事業に分類し, 家庭教育に関する事業としての位置づけをはっきりとさせることで, それぞれの事業を推進する中で, 家庭の教育力を高める機会としての位置づけを再確認することができた。また, 各課における事業の見直しの中でも家庭教育としての観点を持つことができ, 今後においても寝屋川市の家庭教育を連携して進めていくことが可能となった。

「家庭教育支援連絡会」は, 子どもや保護者と常に接している関係機関や市民などで構成されている。平成14年度より, 家庭教育推進のための新規事業を次々と展開してきたが, 「家庭教育支援連絡会」において各方面からの情報や意見を交え, 検討をすることによって, 市民のニーズをふまえた事業展開をすることができた。また, 実施中の事業についても, 情報交換, 意見交流ができ, 事業の改善に活用できている。

④連携した取組

絵本の読み聞かせをつうじて, 赤ちゃんとお過ごし時間をつくり, 赤ちゃんに愛されている実感を育くむために

行っている「赤ちゃんに絵本を贈ろう」事業においては、中央図書館との連携で、本の紹介・展示のコーナーが充実できた。また、健康増進課との連携で、1歳6か月児健康診査の案内封筒に「赤ちゃんに絵本を贈ろう」事業の案内を同封し、健康診査に訪れた方を対象に、健診会場の1階に「えほんのへや」を設置することができた。さらに、ボランティア団体の方々の協力により、実際に読み聞かせをしながら絵本を贈呈することができた。また、子育て支援情報(こども室・中央図書館・地域教育課など)を絵本とともに配付し、啓発の機会となった。

保護者が小学校の入学前に、日々の生活を通して自らの家庭を見つめなおし、自信を持って子育てに取り組んでいく契機となるよう作成している「子育て支援カレンダー」においては、庁内全部局において企画されている5歳児が家族と参加できる行事の情報や(保健所、学校給食会、健康増進課、幼稚園養護部会、こども室、NPO法人ななクラブから)親子クッキングのレシピの提供を受けることができた。中央図書館からの絵本の紹介コーナー、こども室からこども支援センター、ファミリーサポートセンターの事業内容や利用方法の紹介、相談窓口の紹介(家庭児童相談室、教育研修センター、健康増進課や大阪府諸機関)など庁内外の子育て支援情報を盛り込んだ支援カレンダーを作成することができた。

「元気子育てフォーラム」の開催では、家庭教育支援連絡会の委員を通じ、民生委員児童委員協議会、市立校PTA協議会、婦人会協議会、子ども会育成連絡協議会、青少年指導員会、12中学校区地域教育協議会の後援をうけることで、多数の関係者及び市民が参加して開催することができている。また、「家庭教育学級」「家庭教育ふれあいセミナー」の開催で案内は市広報だけでなく、PTAを通じて子育て中の保護者へ参加を呼びかけている。「家庭教育サポートチーム」の派遣では、学校教育部と連携する中で、学校のもつ教育機能を効果的に活用することができた。

また、大きな成果として、これからの寝屋川市の家庭教育推進の方向性を明らかにした「寝屋川市家庭教育推進指針」の策定がある。「庁内検討委員会」で検討し、策定実務担当者会議を立ち上げた。寝屋川市の実態を把握するため「寝屋川市における家庭教育意識調査(平成14年7月実施)」、「寝屋川市子ども意識調査(平成16年7月実施)」を実施し、策定アドバイザーの神戸学院大学人文学部教授神原文子氏の指導や「家庭教育庁内検討委員会」、「家庭教育支援連絡会」において、それぞれの担当・専門分野から多くの意見を集め、寝屋川市の現状に即した家庭教育の指針が策定でき



【えほんのへやのようす】

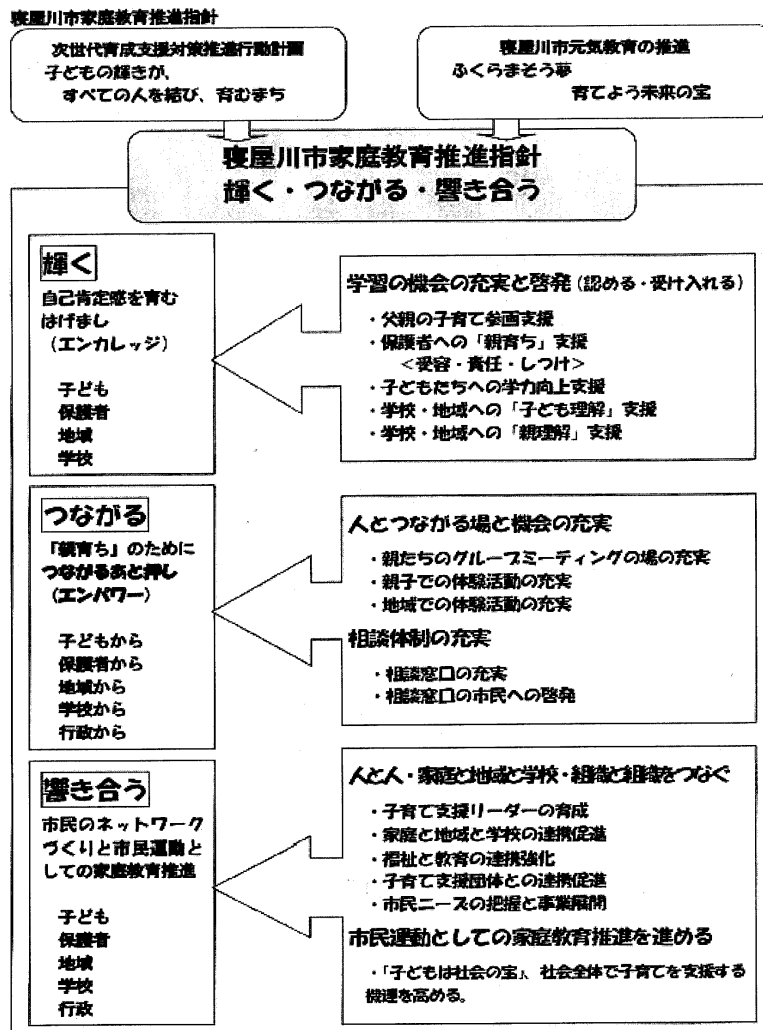


【子育て支援カレンダー】



【元気子育てフォーラム2006】

た。寝屋川市の子どもたちに、もっとも大切である「自己肯定感」を育むことを目標に、親・家庭や子育て支援団体への「はげまし」「あと押し」「ネットワークづくり」の3つが大切であるとの認識でつくられたのが「寝屋川市家庭教育推進指針」である。(図1参照)



【図1】

④連携した取組の成果と課題

各事業において、アンケートを実施して、対象者・参加者の意識を調査している。(表 18年度アンケート結果参照)

事業名	アンケート項目	(アンケート回答数)
赤ちゃんに絵本を贈ろう	・ お子さんに読み聞かせていただけますか。 ・ 本を読み聞かせることが、親子のきずなづくりに役立	100パーセント (126人)

	つと思いますか。	99パーセント(126人)
子育て支援カレンダー	子育てや家庭について考えるきっかけになりましたか。	66パーセント(341人)
元気子育てフォーラム2006	今後の子育ての参考になりましたか。	97パーセント(428人)

「家庭教育庁内検討委員会」と「家庭教育支援連絡会」のそれぞれの場で、各事業ともいろいろな観点で、情報交換、意見交流ができたことで、市民ニーズに対応した実施をすることができスタート当初より、参加者・対象者の感想も予想以上に良好であった。

しかし、設置当初より両者はともに、本市の家庭教育を推進する上で非常に大きな役割を果たしているが、それぞれが検討する観点が違うため、両者が連携、連動して本市の家庭教育の推進をする位置づけがあいまいであった。

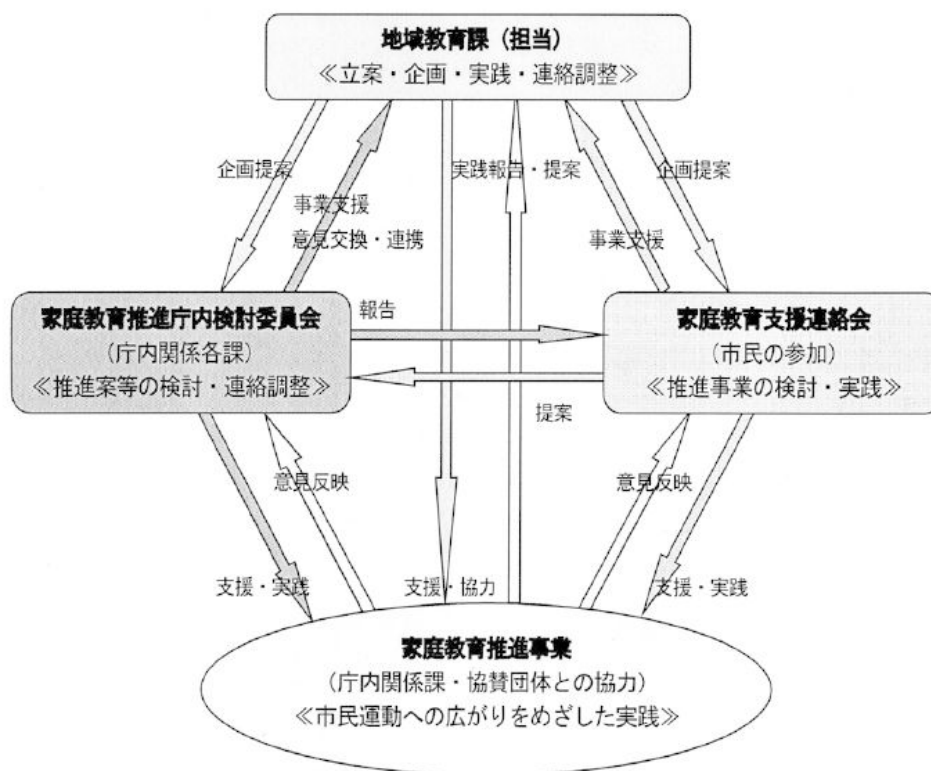
5 今後の方向性や展望

本市においては「寝屋川市家庭教育推進指針」の策定において「家庭教育庁内検討委員会」及び「家庭教育支援連絡会」の両者が同じ内容を検討する機会が増えてきた。そのため、地域教育課が担当課として企画・立案・実践などを行い、両者が連携する中で、事業支援を受けることで、広く庁内関係課、協賛団体の協力を得ることができるよう位置づけをした。(図2参照)

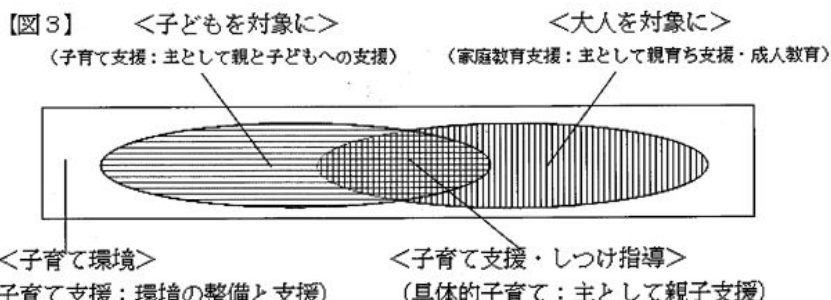
親の生活が多様化する中で、親自身が子育てに関する情報を受けとる場や手段が同居する親や近所とのつながりが中心であった時代から、テレビ、新聞、雑誌などマスコミからの情報の影響が大きくなってきている。さらに最近ではインターネット等を利用したブログやソーシャル・ネットワーキング・サービスなどコミュニケーションツールの利用も広がっており、新しいネットワークが広がってきている。このような情報を得る手段や場の多様化、そして、価値観の多様化も進む中で、家庭教育を推進するために、多方面から親に対する子育て支援情報を提供するとともに、親のニーズに応じた様々な内容の学習機会の提供が必要である。そのために、今後、さらに庁内外での連携を推進していかなければならない。

現在、本市では「寝屋川市こどもプラン」(次世代育成支援行動計画)に基づいて子育て支援事業が実施されており、このプランの中で家庭教育の推進は重点施策の1つになっている。子育て支援と家庭教育支援は密接に関わっており、福祉部こども室との連携は、ますます重要になっている。(図3参照)

寝屋川市家庭教育推進組織



【図2】



18年度は、こども室との連携から、こどもセンター（地域子育て支援センター）に地域の親子が集まる「つどいの広場事業」において、つどいの広場を利用する保護者に対して「家庭教育ふれあいセミナー」を開催した。つどいの広場の利用をする中で顔見知りになった人たちとともに学習に参加できたこともあり、参加者の感想は非常に好評であった。19年度についても開催回数を増やして実施できるよう、こども室とともに企画をしている。こども室の親に対する子育て支援と地域教育課の家庭教育支援については、図3のように、対象者及び内容について重複している部分が多く、今後さらに庁内での連携を推進し、家庭教育支援事業を展開していく。

文部科学省 〒100-8959 東京都千代田区霞が関三丁目2番2号 電話番号:03-5253-4111(代表) 050-3772-4111 (IP 電話代表) 案内図

Copyright (C) Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

出典：文部科学省・http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/07070604/010.htm

日付 09/07/17